

## 負けるな姉ちゃん

平田 つぶら

三月、姉ちゃんが進学のため島を出ました。私の住む小さな離島は高校までしかないで、ほとんどの人が高校卒業と同じに島を離れます。だから姉ちゃんも薬剤師の夢をかなえるため県外へ行くことになり、荷物をまとめ、スマホを買ってもらい、海と畑しかない島から、大喜びで出発しました。私も一緒に使っていた机や布団のことで、何百回もケンカして、命令ばかりされていたので早く引越してっと思っていました。でも、姉ちゃんがいなくなると、一人で使うには全てが広すぎるし、姉ちゃんのも物であふれていた場所もガランと空っぽでだんだん淋しくなってきました。二人で集めていた折紙やシールの箱も一人ではする気もなく、姉ちゃんの好きな曲がラジオから流れた時は聴かせてあげたいなとか、居た時は想像もしなかった姉ちゃんのことばかり考えるようになってきました。両親は時々電話でちゃんと睡眠とっているか、体につけての話をしています。新しい友人や初めての科目、寮生活に雪を見た好奇心で楽しそうな姉ちゃんに私が出した紙を出しても返事をくれません。だから新しい世界で私のことを忘れたのかなと悲

しくもなりました。そのうち姉ちゃんがどんどん元氣のない声になり、「家に帰りたい」と泣いてかかってきた時はビックリしました。「皆が通る道」だからと両親には想定内だったようで、兄たちと笑っています。私はずっと新聞配達を続け貯金したり、夜中まで勉強続けている、姉ちゃんのがんばりをいつも見ていたので姉ちゃんがつらいのはせつなくまりました。そして姉ちゃんが笑って元氣になるよう、家族で姉ちゃんの好きなお菓子や文具品をたくさん送りました。おいしいのを食べて、またがんばればいいさね、でも無理だったら退めて帰って来ていいよの氣持ちを込めて。すると小包が届いた頃は、たつぷり泣いて復活したらしく、お菓子の量が少ないとか、氣が利かないなの文句の電話がきたのでいつもの姉ちゃんに戻って安んじました。心配して損した氣分になつたけど、よかつたって心から嬉しくなりました。家族だからどんなことも氣になるし、無理したり嫌なことでも悩んでいるなら全力で解決のお手伝いをし姉ちゃんを守ります。姉ちゃんの幸せが家族皆の幸せと両親は言います。そして、私の幸せでもありません。側にも離れていても私は姉ちゃんのことを大好きです。いつだって味方だし、姉ちゃんみたいになりたいと思うようになってきました。成人式には帰ってくるので早く会いたいなあ。負けるな姉ちゃん！